

Do-Re

北海道立図書館レファレンス通信

9 (通巻13号)

平成15年1月10日発行

<今号は、増頁・盛沢山の特集号です。>

【目次】

特集にあたって	1
特集その1 平成14年度全道図書館参考調査部門研究集会	
<情報提供1>	
インターネット情報大作戦?~参考調査課の実践・初級編	
北海道立図書館参考調査課 松下悦子&大塚寿信	2
<情報提供2:資料収集とレファレンス~地域資料を中心に>	
文書資料を主な題材として	
北海道立文書館資料課長 山田博司氏	6
平成14年度全国公共図書館整理部門研究集会参加報告	
北海道立図書館北方資料室 加藤ひろみ	8
<情報提供3>	
まち・むらのレファレンスを考える~網走ブロックの事例を元に~	
常呂町中央公民館副館長 加藤孝氏	10
特集その2 こいつは使える!レファレンスブックあなたの10冊 北海道版	
道内中堅図書館員が選ぶ「こいつは使える!」レファレンスブックはこれだ!(得票順)	12
道内中堅図書館員が選ぶ「意外なときに役立った!」のはこれだ	14
おまけ 当館 WebOpac その使い方	15
募集しています!!「市町村図書館職員レファレンス体験研修」特別講座	
《インターネット活用初級編》ご案内	16
News / 編集後記	17



北海道立図書館

069-0834 北海道江別市文京台東町41番地

Tel 011-386-8521

Fax 011-386-6906

ホームページ <http://www.dokyoj.pref.hokkaido.jp/hk-tocho/top.htm>

特集にあたって

特集その1：平成14年度全道図書館参考調査部門研究集会

北海道図書館振興協議会では、毎年当館と共催で各種の研究集会を実施しています。特に部門別については、整理・奉仕・参考調査などと分野を特定した研修を数年サイクルで開催する形をとっています。

全道規模での参考調査部門の研修会は3年ぶりで、平成14年11月21～22日(於・札幌市)に開催されました。今回のテーマは、『レファレンス・サービスと図書館の将来 - 人・モノ・情報でパワーアップ!! -』です。

この1年の各種の大会や研修の企画は、当館各課の連携・協力のもと、テーマ設定や講師の検討を行いました。予算や客観的条件の制約の中で、必ずしも十分な対応にならなかった面もありますが、レファレンスに関する研究集会は当課業務と直接的にリンクする研修でもあり、課内でも事前打ち合わせや内容のすり合わせを行い、積極的に取り組んできました。また、情報提供4件のうち1件を当課員が行いました。



そこで、出席できなかった人にもその概要をお伝えするために、北函振事務局の了解を得て、記録の概略を当「Do-Re」でお知らせすることにしました。

特集その2：「こいつは使える！ レファレンスブックあなたの10冊 北海道版」

上記と同主催の「全道図書館中堅職員研修会」（平成14年7月3～5日）においては、参加者による事前提出資料を「レファレンス実態レポート」（A4判 75p）としてまとめました。これは、〔講義・実習スキルアップ！レファレンス〕枠の一環として作成したものです。その内容は レファレンス・サービス実態レポート レファレンス・サービスに関する案内物 レファレンス・サービス記録票（または処理票） 「こいつは使える！レファレンスブックあなたの10冊 北海道版」です。

情報交換の材料を目的としたものであり、もとより研修外配付・公開を意図したものではありません。しかし、4点目の「こいつは使える！…北海道版」のようなスタイルの目録は初めての試みでした。企画・作成者の了解を得て、この部分を再掲します。

「こいつは…」の名称は、レファレンス研修の先進地域である東京多摩地区レファレンス担当者90名のアンケート集計結果「『こいつは使える！』R本 あなたの10冊」（平成11年3月）になったものです。

中堅職員研修会の参加者は22名（16館）で、“北海道版”とするのは少し無理があるかもしれませんが、今後に向けてのより実態を反映した“北海道版完全版”に近づく第一歩だと考えます。役に立つ資料を知り、使いこなすことは何より肝要ですが、特に 番外編 は、現場の息遣いが感じられる興味深い資料だと思われそうですが、いかがでしょうか。

おまけ：当館WebOpac その使い方

当館Opac公開は12月1日でした。検索時のちょっとした注意事項を簡単にご紹介します。

<情報提供1>

インターネット情報大作戦！？～参考調査課の実践・初級編

北海道立図書館参考調査課

松下悦子&大塚寿信

インターネットの利用人口は、5年前の約1,000万人から今や5倍増の5,000万人と驚異的な伸び。

図書館の利用者にとっても、インターネットは当たり前利用する調査ツールであり、そこで検索した結果や情報をもとにして、図書館に調査にくるといっても増えています。実際に、所蔵調査依頼のあった資料について、書誌情報が確認できず、インターネットで調査したところ、実は書店には並ばずに、ネット販売しているものだったという例もあります。

情報源がインターネットという利用者の増加に対応するためには、図書館でもインターネットを利用しなくてはならない現状になっているのは事実であり、当課の若手2人がインターネット利用術(?)をデモを交えて情報提供しました。

Mission1 インターネットを利用したレファレンスとは?

インターネットを利用してどのようにレファレンスを行うのか？ インターネットの利点は、特に情報の速報性・多様性・豊富さである。速報性で言えば、統計など、印刷物にはなっていないが、ネットで先に発表するということがある。また、多様性と豊富さについては、ごく一般的な料理のサイトから、印刷物にはならないようなマニアックなサイトまで、玉石混交ではあるけれど多数存在している。

手がかりの少ないものやレファレンス・インタビューしても二進も三進もいかないようなレファレンスにおいては、まず問い合わせの内容が、何の分野なのか、哲学なのか、教育学なのか、全く見当がつかないときに、第一手として利用することがある。

インターネットを利用したレファレンスと言っているが、通常のレファレンスとプロセスにおいては、何ら変わりはない。まず、質問の内容を確認し、分析。キーワードを決定し、戦略を練る。どう第一手を打つか？ その場合、参考図書にいくか、一般書にいくか、それともインターネットにいくかということに過ぎない。インターネットを利用する場合には、本を選ぶのと同じように、検索エンジンを選択し、最初に決定したキーワードをもとに検索していく。

Mission2 レファレンス・ツールとして使えるサイト

(1) 国立国会図書館のホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)

10月の関西館のオープンに合わせて、内容が一押し、コンテンツも豊富になり、レファレンスの参考になる内容も増加した。

《テーマ別調べ案内》

項目別に参考図書や関連機関、関連サイトが参照可能。“テーマ一覧”と“特色ある資料群”とに大別され、分野ごとに調べることも可能。どの分野が不明な場合は、キーワード検索も可。

《テーマ別調べ案内 特色ある資料群》

アジア関係資料のところを開き、例えば“満州の国旗・国家”を選ぶと、満州の国旗・国家の掲載資料として「満州帝国総覧」「満州国史」が挙げられている。アジア関係資料の一覧の中には、関西館のアジア資料室の資料室案内も挙げられており、ここでも、“情報の調べ方”というコーナーがあり、こういった場合は、こういう資料を見ればいいのか、というレファレンスの勘を磨くにもいい。

《テーマ別調べ案内 参考図書紹介》

最近3か月の“新着参考図書一覧”と1995年4月以降に受入れした“参考図書累積データ”計14,570件(1月14日現在 毎日更新)を紹介。累積データは分類別になっているほか、検索も可能。新着参考図書一覧は出版年を限定して検索できるので、最近の参考図書の出版を把握でき、自館の購入の参考にすることも。

《データベース・ナビゲーション・サービス = Dnavi》

国内で公開されているデータベースを対象にしたデータベースのデータベース。現在約4,500件のデータベースが

収録。テーマ別にまとまっているので、そこから選ぶことも、キーワード検索も可能。データベースが検索できるので、ある程度、調査内容が絞られているときには、検索エンジンから検索するよりも効率的。

《インターネット資源選択的蓄積実験事業 = WARP》

ウェブ情報を保存する実験を開始。ネット上で公開されている電子雑誌のコレクションがあり、当課発行の「Do-Re」も含め、現在、大学の広報誌、紀要、学会誌などを中心に405件が収録されている。

《国会会議録》

1947年5月の第1回国会から検索できる。発言者や発言内容などからも検索可能であるが、期間が5年ずつしか検索できないのが難点。

《雑誌記事索引》

1948年以降1974年までは人文・社会系のみであるが、国内刊行の学術雑誌を中心に約10,000誌の記事が検索できる。まだデータをすべて登録していないようだが、ここでヒットした記事については、登録制であるが、メールでの複写申し込みができる。

その他、国会国立図書館の電子的な刊行物についても、“刊行物”のページで見ることが可能であるし、図書館や図書館情報学の国内外の動向などを解説している情報誌『カレントアウェアネス』は、1996年以降の号の記事本文を“図書館員のページ”から見ることができる。

(2) NACSIS Webcat (<http://webcat.nii.ac.jp/>)

ここでは、従来の検索システムの再確認と、10月8日から開始された“WebcatPlus”について紹介する。Webcatとは、全国の大学図書館等所蔵の図書・雑誌の総合目録データベースのことで、国立情報学研究所がサービスしている目録システムを通じて、参加図書館がデータの共同作成を行っている。

《従来の検索 Webcat》

検索するときの入力法 タイトル：単語の分かちかフルタイトル 著者名：姓と名の間にブランク 出版者：ブランクなしのべたうち が原則。

公共図書館のデータ入力法と異なることもあり、アルファベットの単語は読みでヒットしないことが多い。例えば、“エフピーアイ”という単語を仮名で入力すると、4件しかヒットしないが、アルファベットで“FBI”と入力すると、130件ヒットする。出版者の場合も同様なことがあり、“ベースボール・マガジン社”を検索する場合、原則ではべたうちなので、そのまま出版者名を入力すればいい。しかし、ベースボールとマガジンの間はどうか。中黒をいれるか、入れないか。両方で検索結果を比較してみると、中黒をいれて検索すると2,224件ヒットし、入れないと55件しかヒットしない。タグ表示を見たいところであるが、普段から注意深く検索することが必要。

《WebcatPlus 連想検索》

連想検索とは、検索キーワードから関連性の高い単語を抽出し、それを含む図書をもれなく探し出す検索方法。NACSIS Webcatの情報とBOOKという図書情報データベースの情報をもとに検索。1986年以降に発行された図書726,228件については、目次や、帯・カバー等に書かれている内容情報も収録されており、検索語がタイトルや著者名に含まれていなくてもヒットする。キーワードだけでなく、自然文で検索できるのが特長。

例えば、「白血病の闘病記」と検索すると、連想される資料なので、白血病が闘病記という言葉のどちらかが少しでも入っている資料はすべて、膨大な資料がヒットしてしまう。表示されるのは、白血病と闘病記という言葉が、より多く情報の中に入っているものからなので、最初の10~20件くらいが実際に求める資料に該当する感じなのだろうか。

《WebcatPlus 一致検索》

探している図書が明確な場合、書名や著者などのキーワードを入力することで検索する方法で、内容からヒットする部分以外は従来の検索に近い結果となる。しかし、ここでヒットした結果をもとにさらに連想検索することもできる。

例えば、中島敦著の「李陵」を検索すると、32件ヒットするが、その中から「李陵・山月記」をチェックし、連想検索すると、研究書もヒットするし、李陵は実在の中国の歴史的人物なので、そういう観点からの李陵に関する資料もヒットすることになる。使いこなせれば、かなり調査の幅が広がっていくと思うが、連想検索も一致検索も、まだ使いこなせている状況とは言い難く、試行錯誤の状態である。

(3) 検索サイト

「ヤフー」や「グーグル」など検索エンジン（またはサーチエンジン）と呼ばれるものは、日本ではおよそ10年前に開発され、発展してきた。例えば、「ヤフー」は1996年4月にサービスを開始、「グーグル」の日本語版は2000年9月にリリースされたものである。

用語説明

《サイト》と《ホームページorページ》
 サイトとは、ホームページの集合体。
 例えて言うと、全集のタイトルが《サイト》で、
 その中に収録されている各作品が《ページ》に
 該当。

インターネットを使うのにあたって検索エンジンは必要不可欠なものになってきているが、検索エンジンといってもたくさんのサイトがあり、どれを使うべきか迷うことがあると思う。検索エンジンの種類とその特徴については次のとおりである。

検索エンジンの主な種類

種類ごとに一長一短の性能があるので、実際どう使い分けたら良いか。

「公式ホームページを探したい」「探している情報があいまい」といった場合にはディレクトリ系、「求めている語句を含むページに直接行きたい」「探しているものを早く探したい」といった場合にはロボット系、を使ったほうが良いように思う。

例えば、料理について調べるとして、「夕食のメニューに参考になるもの」といったあいまいなものだったなら分類され辿っていくことができる「ヤフー」などのディレクトリ系、「石狩鍋の作り方」といった具

	ロボット型	ディレクトリ型	(メタ型)
機能	インターネット上を検索ロボットが自動巡回をして蓄積したページ内の単語を検索	検索エンジンの運営者がフィルタリングしてサイトの中から、キーワードに合致したサイトを探す	一つのキーワードで複数の指定した検索サービスで検索。
長所	・情報量が多い ・探している言葉が掲載しているページを探せる	・分野で探すとき便利 ・索引・要約の信頼度が高い	一度に複数の検索サービスを調査できる
短所	・絞り込みに時間が掛かる	・データ量が少ない	絞り込みを行うためのオプション指定が限定される
代表的サイト	・Google ・excite など	・YAHOO! Japan ・BIGLOBE など	・MetaCrawler ・Ceek.jp など
	・goo, Infoseek Japan は両方の機能を持つ		

体的なレシピを探すのならページごとに含まれている語句を探すことが出来る「グーグル」などのロボット系で探すと見つけやすい。

また、検索エンジンには様々なコンテンツがあり、どのサイトに何があるかを知ると便利である。例えば、「グー」では「ディリー新語辞典」、「インフォシーク」では「現代用語の基礎知識2001年版」の情報がある。さらに、「インフォシーク」や「エキサイト」では、翻訳コンテンツがあり、単語・文章の変換はもちろんHPのアドレスを入れることにより英語のサイトを日本語表示する。「グー」では「教えてグー」というコンテンツがあり、ここではユーザ同士で質問・回答をしていて、これを読むと思わぬところでレアレンスのヒントとなることもある。

こういったコンテンツの充実も検索エンジンの特徴と言える。

(4) こいつは使える！おすすめめサイト

《総務省統計局統計センターのページ》 (<http://www.stat.go.jp/>)

国勢調査を始め、国の統計情報速報版を中心にみる事ができる。冊子体より早く出るなど、最新のものを探すの

ならここがおすすめ。

《「金融庁」のサイト》 (<http://www.fsa.go.jp/>)

「EDINET」と呼ばれるページがあり、「証券取引法に基づく有価証券報告書等の開示書類に関する電子開示システム」のこと。提出されたすべての開示書類をインターネット上で閲覧することができる。ここで公開されているものは、電子媒体で提出されたものの検索で、会社名で調べることができる(五十音)。

《「国税庁」のサイト》 (<http://www.nta.go.jp/>)

「路線価図」の閲覧可能。路線価図は地域ごとに引くことができる(五十音)。

《「特許庁」のサイト》 (<http://www.jpo.go.jp/>)

「特許電子図書館」では、特許・実用新案、商標公報を閲覧できるほか、検索機能もある。検索できるものは、データ上新しいものが多いが、実際に画面上で見ることができるようになっている。

Mission 3 レファレンス インターネット - インターネットの注意すべき点 -

インターネットの情報量は膨大なものであるが、それが万能ではないということを確認しておきたい。検索エンジンに単語を入れれば、関連情報がたくさん出てくる。しかし、それら情報を鵜呑みすることはできない。特に個人作成のHPでは何から引用したかの記載がされていない場合が多く、レファレンスの基本である複数の情報から当たることはこのインターネット上でも必要なことと言えるし、印刷物にも当たることは肝心。

また、インターネットでは情報そのままだが掲載されているだけで、他の関連情報を探す場合は再度検索が必要となる。それに比べ、印刷物では速やかに違うページや本に当たることができる。インターネットの情報がすべてではない。あくまでも一つのツールとして、印刷物とインターネット情報をうまく使い分けていくが、今後より一層の課題となると思う。

そして、著作権に関する問題がある。インターネットで得た情報をプリントアウトすることは、「私的利用」や「教員の教材作成」などの権利制限が適用される以外は、著作者の了解が必要となる。これに対し、異論を唱える学者・研究者もいない訳ではないが、今後HP作成者が、複製の諾否についてHP上で記述するということが普及していければいいと思う。

最後に、インターネットとどう付き合っていくかについてであるが、インターネットを使うにあたり、使えるサイトをまとめていくことが必要。ある程度の分類別にまとめておくことにより調査時間の短縮ができ、自館のHPのリンク集を作る際の参考にもなるはず。整理はある程度の経験が必要だが、まずは収集することから始めると良いと思う。

インターネットは量をこなすことが肝心。キーワードの入力の仕方、コツについては、レファレンス・ブックを知るには実際に使うのが一番であるのと同様に、経験することが一番の近道と言える。

インターネットが発展するとともに使う側もレベルアップすることが必要になるが、図書館員同士の情報交換をして情報を共有し、お互いステップアップしていければいいと思う。

<お知らせ>

この時の情報提供を拡大して、「市町村図書館職員レファレンス体験研修」特別講座《インターネット活用初級編》を開講することになりました。詳しくは、16頁を見てねっ!!

<情報提供 2-1> 資料収集とレファレンス～地域資料を中心に

文書資料を主な題材として

北海道立文書館資料課長 山田博司氏

図書とは、同一のものが複数存在する。一方、文書（もんじょ）は世の中に唯一、一つしかない。まず、図書と文書の違いとは何かということから始まりました。

1 地域の資料は地域に残せ - 資料の現地保存

文書がこの世に一つしかないことを前提として、どこが保存するのか。その基本は現地である。

地域の資料は、当然地域に関する情報が含まれており、該当する地域でこそ活用でき、かつ活用したいと思っているのは地域の人であり、それでこそ最大限活用できるという認識を持っている。自分のマチのことを調べるのに、わざわざ高い交通費を支払って、札幌や東京に出かけていかなければならないという状況ほど馬鹿馬鹿しいことはない。

戦後、農村経済や家制度の調査のため地域に入った大学研究者等が、関係文書を自分の大学や研究機関に持ち帰ってしまった結果、ごく普通の人々にとっては使いにくい、地域に役立てることが困難となってしまった過去の反省から現地保存の重要性が強く認識されるようになった。

しかし、現地保存が不可能な場合、やはり優先されるべきことは“残す”ということであり、山田氏もかつて原則破りをせざるを得なかった経験も率直に語ってくれました。

文書館では、資料の現地保存の原則に基づき、地域の資料を集めるのではなく、地域の資料の情報を収集していくことを基本的スタンスとする一方、積極的に収集しているのは、道立の施設として北海道が日々生み出す行政文書（公文書）である。

2 見逃されがちな行政資料 - 役所の文書が歴史資料となった日

行政刊行物を具体的にどのように収集・提供・保存していくか、北海道の例を挙げながらシステムを作るということの説明がありました。

北海道では情報公開の窓口である行政情報センターで一元的に収集し、文書館や道立図書館、14支庁の行政情報窓口などに配付され、提供される。

各市町村で作られる行政刊行物などは、将来、過去の姿を知る基本的な資料として重要なものであり、きちんと残す必要がある。

公文書については、北海道においても開拓使時代（明治2～15年）や三県一局時代（明治15～19年）など昔の公文書は歴史資料として市町村史編纂に携わる人びとを始め多くの人に利用されてきた。同様に今日生み出されている公文書もまた、将来の歴史資料であり、この法的根拠は「公文書館法」（1987（昭和62）年12月9日公布）である。

この法第1条によって、公文書は歴史資料としての位置づけを得、公文書館は、システムを作り、収集し、整理し、提供し、そして保存する役割を担うことになった。しかし、残念ながら公文書を系統的に収集する道内の事例は旭川市の市史編纂室など、僅かではない。したがって、多くの市町村の現状は公文書は保存年限が過ぎると、廃棄される運命にある。

資料を収集・整理・提供・保存する一角を担う図書館ももっと地域の歴史を語り、行政刊行物以上に生々しい歴史資料と言える公文書の収集やシステムづくりと言った点に目を向けて欲しいと訴えられました。

平成の大合併と言われ、市町村合併が騒がれる今日、公文書の散逸が心配である。昭和の大合併と言

われ、大規模な市町村合併が行われた昭和 20 年代後半から 30 年代始め、とりわけ吸収合併された市町村の公文書類は必ずしも良好な状態で保存されず、放置 処分といった道をたどった例が少なくなく、公文書の保存に危機感を持っている。

このことは、山田氏のみならず全国歴史資料保存利用機関連絡協議会や地方史研究協議会においても同様で、総務省に要請文を送り、総務省 都道府県 市町村というルートで文書が送られているようですが、図書館員も含め地域で公文書に携わる人間に歴史資料保存の意識を持って欲しいとの発言がありました。

3 私文書(しもんじょ)調査の経験から - 調査は捜査だ、現状を残せ!



私文書類の取り扱いの留意点は、どんな状況で残っているか、それを把握することが資料のより大きな情報を得ることになる。例えばA文書があったとしたら、文書類のうち手紙類だけをまとめてしまうことはしない。手紙があった前後の文書との関連付けをすることが大事で、最優先すべきはどのような状況にあるかを把握した上で目録づくりをすること、またB文書と一緒にするようなことをしていはいけなないのが文書類の取り扱い方法である。

その後、目録を作成し、所蔵者や関係機関に配付し、所蔵者などに貴重な資料を所蔵していることを認識してもらうことが、保存のための力になる。将来は、所在情報の目録も作っていきいたい。

個々人が所蔵している私文書の情報は、インターネットに全く引っかけられないアナログの世界である。“所蔵者自身が貴重だと思っていない、しかし地域にとって貴重な資料の情報をどう発掘していくか”ということが課題となる。

愛媛県の人から倉本聡氏に寄贈された資料が文書館にたどりついた最近の例から考えると、自分たちの活動を広く住民に周知することが大切であることを強く感じている。

最後に、市町村合併と公文書の保存、今後ますます増大する電子公文書の収集について、どう対応していくか、図書館にもこれら文書にどう関わっていくべきか、考えて欲しい。

北海道新聞(朝刊) 平成 14 年 11 月 6 日(水)より(著作権許諾済)

<質問から>

具体的な文書の整理：個々の文書によって対策が異なるため、必要があれば文書館への来館をお勧めします。

地域資料の提供での留意すべき点：やはりプライバシーの問題です。公文書の場合、執務上作成されたものではありませんが、生々しい個人情報もあります。が一方で文書館は、公開し、利用されてこそ意味のある機関です。どう折り合いをつけるかが課題となります。

文書館では国立公文書館の規則を参考とし、個人情報の公開についてはその内容により、50年、80年、100年の非公開期間を設定しています。また、公文書の保存については「北海道文書管理規程」によって、保存年限が終了したものは文書館で保存されることになっています。

電子文書等の収集：道では、来年度から北海道総合文書管理システムが稼働し、文書館もこれに参加し、将来残すべき電子公文書は、自動的に文書館のサブシステムに入ってくる仕組みになっています。紙媒体だけではなく、今後は電子資料の収集も視野に入れる必要がありますが、ネット上やメールでの配信物をどう収集していくか、図書館においても問われる時代となっています。

<情報提供 2-2 > 資料収集とレファレンス～地域資料を中心に

平成14年度全国公共図書館整理部門研究集会参加報告

北海道立図書館北方資料室主査 加藤ひろみ

9月19・20日の2日間、秋田市において標記の研究集会が開催されました。研究主題は“地域資料再発見 - 新しい時代における資料のあり方を考える”でしたが、地域資料をメインテーマに掲げるのは実に20数年ぶりとのことです。今回は、地域資料はもちろんのことレファレンスに深く関わった内容で、東京大学の根本彰先生の講演のほか、3人の方の事例発表がありました。

研究集会に参加した当館職員加藤が情報提供しました。

1 講演 地域資料サービスのリストラクチャーリング：地方分権、IT、図書館経営 根本彰氏（東京大学）

(1) 最近の話題から

最近の話題として根本氏は3点挙げた。1点目は、昨年告示された「公立図書館の望ましい基準」である。この基準は、地域の情報提供に重点がおかれ、図書館としては武器として使えるのではないかと、ということ。2点目は、ベストセラー提供に対する社会的な論議である。“貸出し”をどう考えるか、ということになるが、2つの方向があると思う。貸出しを重視し、ベストセラー、予約、ビデオなどの要求に応じていく方向であるが、この方向は公貸権の道を開くのではないかと。一方、貸出しは重視するけれども、加えて読書案内、レファレンス、地域資料、情報発信などにも力を入れ、多様化への道を歩む方向である。前者は70年代以降図書館界において戦略的にとられてきた道ではあるが、今後は後者の多様化への道を切り開くことが大切であると思う。3点目は、IT関係であるが、図書館の機械化やインターネットの利用などは進んだが、商用オンラインデータベースの導入や電子資料のオンライン公開は5%足らずである。これらは、読書案内やレファレンスに有効であり、その利用促進が課題と言える。

(2) 地域における図書館：調査研究機能の再評価

地域の構成員（行政、議会、企業、NPO、メディア、住民）にはなかなか情報が行き渡っていないのではないかと。そこで、情報を共有化し、情報を発信するといった場合に、図書館がどんな役割を果たせるか。図書館が、互いの結節点（結び目）になり得るかが、地域における図書館の課題であり、重要な点であると思う。

資料・情報といった点では、一般資料においてはレファレンスを念頭において、地域の実情に合わせて、例えば医療・健康、ビジネス・消費者関係を収集するといったように、特化したコレクションの構築を考えてもいいのではないかと。一方、例えば児童・青少年をサービス対象と考えるなら総合的な学習の時間、一般成人であれば仕事のサポートといったように、サービス対象を明確化し、絞るといったことも考えられるのではないかと。

(3) 地方分権と地域情報サービス

《地域の問題は地域で解決していく》というのが、地方分権の考え方である。《図書館が地域の情報拠点》と言うのであれば、もっと実績を積む必要がある。インターネットや商業オンライン情報を収集し、いかに有効に使えるかを考えるべきである。また、どこのマチにも行政資料室や行政情報センターのような機関があるが、資料の蓄積、レファレンス対応、図書館的機能などは、どうなっているだろうか。もし、それぞれができていないのなら、日野市の市政図書室のように、図書館自身がそういう機能を取り込んでいくことが肝心ではないだろうか。

地域資料の収集・提供といった観点からは、コレクションをどう構築するか、方針を見定めることが必要で、《集まる》から《集める》収集をしていかなければならない。また、収集した資料の付加価値を高めるためには、分類・目録はもちろんのこと、書誌や索引など、別の面から探せるツールの作成

が必要であり、このことこそが図書館の本来的なサービスであると言える。

(4) 地域情報サービスの課題

流通する出版物だけではなく、非流通出版物も収集し、提供すること。また情報を加工し、発信することも大切である。これらは、大きなコストがかかるが、実践していかないと今後図書館は生き残れないのではないかと。

さらに、図書館間だけではなく、市長部局や教育委員会、地域の団体や企業の担当者同士の連携などを図っていく必要があるだろう。

(5) 図書館による情報発信

各図書館で一次資料のデジタル化は進んでいる。これは資料保存とPRになるが、今後は雑誌記事索引(例：静岡県立図書館)や人物往来(岡山県総合文化センター)など、インターネット発信による2次資料的なサービスが望まれる。

従来紙媒体でやってきた丁寧な伝統を、電子技術を利用して便利なやり方を構築することが必要になっている。図書館といえども、これらのためのコンピュータ、ネットワークの知識は不可欠であるが、そのための研修は不十分と言える。したがって、こういった研修会を通じて情報や技術を交換していければいいと思う。

2 事例発表

- (1) 「地域資料の時代 『地域資料入門』の編集と小平市立図書館の実践を通して見えてきたもの」
蛭田廣一氏(小平市中央図書館)
- (2) 「郡山市図書館における郷土資料の収集と整理」
佐久間典子氏(郡山市中央図書館)
- (3) 「地域情報の共同配信を目的とする電子図書館と電子自治体の融合 - DublinCore と Z39.50 を技術基盤とする岡山県の構想」
森山光良氏(岡山県総合文化センター)

- (1) : 21世紀はグローバルな時代ではあるが、同時にローカルな時代でもある。一人一人の生活はローカルなものなので、一人一人の要求に応えていきたい。地方分権への取り組みの中で、図書館再評価のきっかけとなる仕事のひとつとして地域資料サービスがある。<蛭田氏は、地域資料サービスの第一人者と言われる方です。>
- (2) : 郡山市では、昭和19年からの新聞の切抜きを続けている。負担も大きく、今後は行政の理解も得ながらデータベース化を実現したい。郷土資料をめぐる問題では、同窓会名簿は非公開、同人誌などに掲載されている名簿類については、個人情報に留意するよう声をかけるなど、個人情報をどう守っていくかに苦労している。
- (3) : 電子図書館において、今後は、品質の高いデジタルコンテンツを効率的に蓄積し、さらに膨大な蓄積情報を横断的に取捨選択する仕組み作りが課題である。この課題解決のために DublinCore を採用した整理基準の確立と Z39.50 による汎用的横断方法の確立が必要。

<紹介された主な参考文献>

- 「情報基盤としての図書館」(根本彰著 勁草書房 2002)
- 「地域資料入門」(三多摩郷土資料研究会編集 日本図書館協会 1999)
- 「Z39.50 と DublinCore を用いた郷土関係電子図書館ネットワークの構築 『デジタル岡山大百科』における構想と課題」(森山光良著 『デジタル図書館』 21所収 2001.11)
- 「総合目録ネットワークの現状と今後の展望」(森山光良著 『図書館誌』 96-3 所収 2002.3)
- 「地域資料論文集」(全国公共図書館整理部門研究集会実行委員会事務局 2002)

上記参考文献は、当館にすべて所蔵しています。

地域資料に特に関心のある
人の必読文献はこれ!

根本先生や蛭田氏の
論文多数収録はこれ!

<情報提供3>

**まち・むらのレファレンスを考える
～網走ブロックの事例を元に～**

常呂町中央公民館副館長 加藤孝氏

網走ブロック（網走市、斜里町、小清水町、女満別町、清里町、常呂町、東藻琴村の1市5町1村。常呂町以外は図書館設置）では、平成8年度から網走ブロック教育委員会協議会の主催事業としての図書館職員研修会が発足し、9年度からは年6回の研修を実施しています。その研修の中から、自分たちで考え、生み出されていったことや館運営に役立ててきたことなどがたくさんあると加藤氏は話されます。今回は、まち・むらのレファレンスの周辺に関わる話題を提供いただきました。

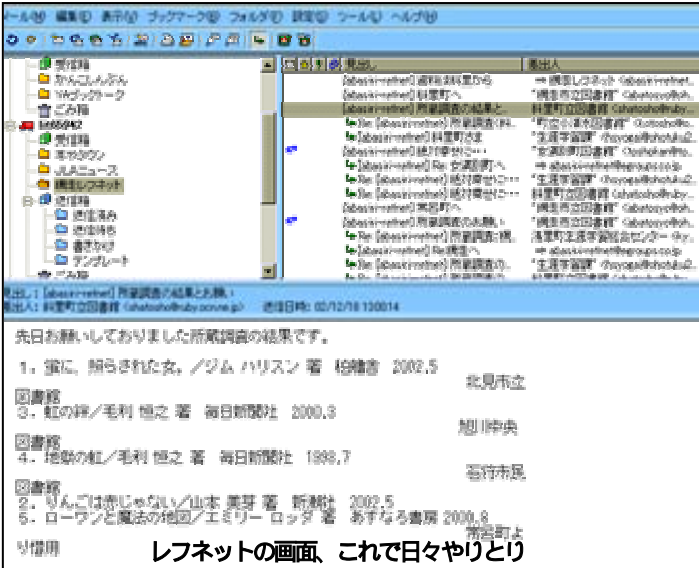
1 網走ブロックの状況 - 研修会が果たしていることと網走レフネットの可能性

研修は、現場の自分たちが必要としている身近なテーマを自分たち自身で組み立て、話し、提案し、その場にいなくても参加できるような場にしていくことを、最初から大事なことから取り組んでいる。

研修を通じて自分たちの知識や蓄えてきたことを全体に受け継がれるようになった結果、中堅職員が身近な研修会では講師になることを当然と感じられるようになってきている。このことは大きな成果であると思う。また、研修会に参加できなかった職員も含めて本を読み、原稿を書き、オススメ絵本のブックリストなどが誕生してきた。

その他、網走ブロックでは、研修幹事が年6回の研修の仕切りを行うが、網走管内全体の研修幹事会にも参加している。

一方、自館だけでは限界がある資料提供やレファレンスに関しても、7市町村すべてで



メールが使える環境が整ったことに伴い、12年度からメーリングリスト（「網走レフネット」：通称「レフネット」）を活用して、相互貸借に成果を挙げている。今では、まずブロック内で資料を探ることが日常的な感覚になり、ほぼ毎日利用され、ブロック内で解決できる割合がほぼ50%に達している。当初は、皆でレファレンスも考えていけたらいいという思いもあったが、現在レファレンスのやり取りはそれ程多くはない。

2 「平成9年度網走ブロック図書館職員研修録：スタッフマニュアルから見えてきたこと

9年度には、資料提供を前提にした場合のレファレンスとリクエストを取り上げ、ブロック内共通で使えるスタッフマニュアルの原型の作成に取り組んだ。現実的にはマニュアルが各図書館（室）で活用されているわけではない。

しかし、当時皆がレファレンスとは何か、どう対応したらいいのか、という問題を共通のテーマとして考えられたこと、そしてそのことを文章化したことは、どこかで財産になっているように思う。

この時の成果は、「網走ブロック社会教育主事等研修報告 平成9年度」（網走ブロック市町村教育委員会協議会1998）の中に『図書館サービスの向上をめざして 図書館職員のスタッフ・マニュアルをつくる』として結実しています。

3 網走ブロックにおけるレファレンスサービスの現状

11月に行ったレファレンス・サービスに関するアンケート調査の結果から、館によって差はあるが、レファレンスはそれほど日常的ではないことがわかった。

レファレンス・サービスを行う上で問題となっているのは、厳しい職員体制の状況の中では経験を積んだ力を持つ職員の配置が難しいということである。また、必要に応じて記録を取ることが習慣化しており、職員全体がその記録を利用できる仕組みは整っているが、同じようなレファレンスが来ても、記録票を役立たせることができない状況も報告されている。

このようなことが、網走ブロックだけではなく、小さなマチの共通の問題であるならば、これらの問題をどう解決していけばいいのかが、全体で考えられる場の仕組みがあればいいと思っている。

また、ブロックの今後の課題として、レフネットや何らかのデータベースソフトを活用して、広域レファレンスに取り組み、レファレンスの成果を共有化していく可能性を模索している。また、自身としては全道規模でレファレンスの事例をデータベース化していく可能性を提案したい。

4 常呂町の今とこれからを

コンピュータを使ったレファレンスツールとして、常呂町では二つのものを提供している。

一つは、「広報ところ」と10紙程度からなる常呂町に関する新聞のスクラップをシェアウェアのデータベースソフト「McardDB」(インターネット上でダウンロード可)を使ってデータベース化している。キーワードを登録し、全体から該当する記事を絞り込んでいくという方法で検索していく。しかし、まだそれ程利用されているとは言えない。

もう一つは「北海道新聞記事データベース」のインターネット版である。全道版、地方版を問わず検索が簡単にでき、経費も安く、縮刷版の代わりに果たしている。

また、学校との関係では、学校図書館も常呂町全体のシステムの一つであるという考え方から、昨年からは関係強化を図り、町内の小中学校の蔵書検索も可能となった。学校にとっては、台帳業務の軽減、図書館にとっては蔵書の幅が広がったと言える。さらに、学校図書館の排架やレイアウトなどの協力も行い、利用増へとつながっている。

予想される行政改革や市町村合併を前に、常呂町全体の図書館システムを構築していくための話し合いを定期化し、そのための協議会のようなものを考えている。加えて、合併後の中で、自立した地域館となるような可能性やシステムづくりも考えたいと思っている。

網走ブロック唯一の図書館未設置自治体常呂町でも、平成15・16年度くらいには条例設置したいというお話しも合わせてされておりました。市町村合併後を見通し、最低限町の条件整備を図っていきたいとのことです。

5 まとめ：まち・むらのレファレンスを考える

人口減少、子どもの利用減、高齢化など、小さいマチにとっては難しい課題が多いが、行政や住民に対して図書館がどれだけのことをしていくか、できるか、行政評価として住民に見える形で示していく必要性を感じている。人・金・資料などないない尽くしではあるが、できることからの底上げを考えていきたい。

レファレンスは数値目標化がなかなかできないし、従来のチェックリスト(例:「図書館雑誌」1997年3月号の『図書館評価のためのチェックリスト』)では難しいように思うが、今後のブロック内の研修会で評価の指標づくりをしていく予定である。

ブロック内で、ずいぶん勉強し、成長したと思う。今後は全道レベルで、共に考え、共に成長できたらと思っている。

<特集その2：こいつは使える！レファレンスブックあなたの10冊 北海道版>

道内中学校図書館員が選ぶ「こいつは使える！」レファレンスブックはこれだ！（得票順）

番号	書名	出版者	出版年	分類	票数	備考
1	imidias (イミダス)	集英社	年刊	031	8	
2	世界大百科事典 全35巻	平凡社	1988	031	6	
3	知恵蔵	朝日新聞社	年刊	031	6	
4	北海道年鑑 全2巻	北海道新聞社	年刊	059	6	北の資料 105
5	角川日本地名大辞典 全47巻別巻2	角川書店	1978~90	291	6	Do-Re 4(通巻8)
6	日本書籍総目録	日本書籍出版協会	年刊	025	5	Do-Re 3
7	大漢和辞典 修訂第2版 全14、補巻1	大修館書店	1989~2000	813	5	Do-Re 4(通巻8)
8	現代用語の基礎知識	自由国民社	年刊	031	4	
9	理科年表	丸善	年刊	403	4	Do-Re 2(通巻6)
10	国書総目録 補訂版 全9巻	岩波書店	1989~91	026	3	
11	北海道大百科事典 全2巻	北海道新聞社	1981	031	3	北の資料 105
12	朝日学習年鑑 学習、統計 全2巻	朝日新聞社	年刊	059	3	
13	日本国勢図会	矢野恒太記念会	年刊	351	3	Do-Re 3(通巻7)
14	記号の事典 セレクト版 第3版	三省堂	1996	801	3	
15	広辞苑 第5版	岩波書店	1998	813	3	
16	大宅壮一文庫誌記事総索引	大宅壮一文庫	1985~	027	2	Do-Re 4(通巻8)
17	どこの本で調べるか 増補改訂版(小学校版全10巻、 中学校版全8巻)	リブリオ出版	1997	028	2	
18	絵本の住所録 テーマ別絵本リスト新版	法政出版	1998	028	2	
19	日本大百科全書 第2版 全26巻	小学館	1993~94	031	2	
20	世界年鑑	共同通信社	年刊	059	2	
21	国史大辞典 全15巻-15巻は3冊	吉川弘文館	1979~97	210	2	
22	現代日本人名録 新訂 全4巻	日外アソシエーツ	2002	281	2	
23	全国市町村要覧	第一法規	年刊	318	2	
24	業種別貸出審査事典 第9次新版全8巻	金融情報事情研究会	1999	338	2	
25	日本統計年鑑	総務省統計局	年刊	351	2	
26	雑誌新聞総カタログ	メディア・リサーチ・センター	年刊	027	1	Do-Re 3
27	平凡社大百科事典 全16巻	平凡社	1984	031	1	
28	学研まんが辞典シリーズ	学研	1986	031	1	
29	総合百科事典ポプラディア 全12巻	ポプラ社	2002	031	1	
30	ビジュアル博物館	同朋舎	1990~	033	1	Do-Re 4(通巻8)
31	ブリタニカ国際年鑑	ブリタニカ・ジャパン	年刊	059	1	
32	読売年鑑 全2巻	読売新聞社	年刊	059	1	
33	朝日年鑑 休刊	日新聞社	年刊	059	1	
34	明治大正期の北海道	北海道大学	1992	210	1	北の資料 107
35	日本歴史館	小学館	1993	210	1	
36	岩波日本史辞典	岩波書店	1999	210	1	Do-Re 4(通巻8)
37	新撰北海道史 全7巻	清文堂出版	1990~91	210	1	北の資料 107
38	新北海道史 全9巻	北海道	1969~81	210	1	北の資料 107
39	TRC 人名典拠録 全3巻	図書館流通センター	1991	280	1	
40	北海道歴史人物事典	北海道新聞社	1993	281	1	北の資料 106

番号	書名	出版者	出版年	分類	票数	備考
41	人名よみかた辞典 増補版 全2巻	日外アソシエーツ	1994	281	1	
42	朝日日本歴史人物事典	朝日新聞社	1994	281	1	
43	人物レファレンス事典 新訂増補 全4巻	日外アソシエーツ	1996~2000	281	1	
44	北海道人物人材情報リスト	日外アソシエーツ	隔年刊	281	1	北の資料 106
45	北海道開拓有功労者関係資料集録 全2巻	北海道	1971~72	281	1	北の資料 106
46	図説大百科世界の地理 全24巻	朝倉書店	1996~2000	290	1	
47	都道府県別日本なんでも情報館 新訂	ポプラ社	2001	291	1	
48	北海道自治年鑑 全2巻	北海道広報社	年刊	318	1	
49	現行法規総覧	第一法規	加除式	320	1	
50	帝国データバンク会社年鑑	帝国データバンク	年刊	335	1	
51	東商信用録 北海道版	東京商工リサーチ道支社	年刊	335	1	
52	日本の通貨	アカデミー	1997	337	1	
53	世界国勢図会	矢野恒太記念会	年刊	350	1	
54	都道府県別データブック	PHP 研究所	年刊	351	1	
55	統計情報インデックス	日本統計協会	年刊	351	1	
56	北海道統計書	北海道	年刊	351	1	
57	調べ学習ガイドブック	ポプラ社	隔年刊?	375	1	
58	世界科学大事典 全21巻	講談社	1977~87	403	1	
59	20世紀暦	日外アソシエーツ	1998	449	1	
60	21世紀暦	日外アソシエーツ	2000	449	1	
61	気象年鑑	財務省印刷局	年刊	451	1	
62	原色牧野植物大図鑑 改訂版、新版	北隆館	1996~97	470	1	
63	レッドデータアニマルズ 全9巻	講談社	2000~01	480	1	
64	食品図鑑	女子栄養大出版部	1998	498	1	
65	略語大辞典 第2版	丸善	2002	503	1	
66	料理食材大事典	主婦の友社	1996	596	1	
67	そだててあそぼうシリーズ 全45巻	農山漁村文化協会	1997~2002	620	1	
68	日本美術館	小学館	1997	702	1	
69	美術年鑑	美術年鑑社	年刊	705	1	
70	西洋美術全集絵画索引	日本図書館協会	1999	723	1	Do-Re 4(通巻8)
71	図解スポーツルール大事典 3訂	東陽出版	1997	780	1	
72	日本国語大辞典 第2版 全13巻	小学館	2000~02	813	1	
73	最新ひと目でわかる全国方言一覧辞典	学研	1998	818	1	
74	近代文学難読作品名辞典	日外アソシエーツ	1998	910	1	
75	個人全集・作品名総覧	日外アソシエーツ	1985~	910	1	
76	通解名歌辞典	創石社	1990	911	1	
77	日本秀句の辞典	小学館	1995	911	1	
78	中国学芸大事典	大修館書店	1978	920	1	
79	英米小説現代邦題事典	日外アソシエーツ	1996	930	1	Do-Re 4(通巻8)
80	北海道統計	北海道	月刊雑誌		1	

1: 書名・出版者・出版年およびなるべく最新刊のものを掲載しました。

2: その他、地域資料(市町村史、地域出版物、地域誌、要覧)などもあがっていましたが、割愛しました。

3: 番号欄の数字に下線があるものは道立図書館未所蔵、斜め数字となっているものは道立図書館全巻揃っていないこと、背景が黒くなっているものは道立図書館最新版未所蔵を表します。

道内中堅図書館員が選ぶ 「意外なときに役立った！」のはこれだ！

番号	分野	意外なときに役立ったものは？	その訳は？
1	やっぱり活字資料でした	「どの本で調べるか」(リブリオ出版 1997)	とにかく難しい質問をやさしく説明してくれる児童書はGood!
2		「年表で見るモノの歴史事典 全2巻」(ゆまに書房 1995)	様々なモノの歴史を詳しく記し、レファレンスの多様な質問に対応可。
3		「日本・世界大事件史」(国会資料編纂会 1994)	歴史的演説、宣言、声明、手紙などが調査できる上に作家の遺書や筆跡等川といったものまで掲載。
4		「日本史文献解題辞典」(吉川弘文館 2000)	古文書、古記録、典籍などの文献史料のほか、考古学的遺物や美術的史料まで調査可能!
5		「世界地理大百科事典 1 国際連合」(朝倉書店 1998)	紙地図に始まり、それぞれの機関の概要が詳細に。分類が2なのが難...
6		「角川日本地名大辞典 1 北海道」(角川書店 1987)	下巻巻末の資料編。特に「北海道団体移住一覧」。
7		「明治・大正家庭史年表」(河出書房新社 2000)	“衣食住”、“家計・健康・教育”、“文化・レジャー”、“社会・交通”という4項目を網羅し、各年の社会生活が把握できる。
8		「昭和・平成家庭史年表 1926-2000」(ゆまに書房 2001)	上に同じです。
9		「議会制度百年発達史 全10巻」(1990)	法律の成立日まで掲載。衆・参議院会議録がそこに...
10		「札幌市統計書」(札幌市企画調整局 年刊)	札幌市の人口など、数字にできるものはすべて掲載!
11		「我が家でできる! レンガワーク」(立風書房 2001)	土地柄レンガのレファレンスが豊富、レンガの種類や自分でできる細工など掲載。
12		「米のはなし 1~2」(技報堂出版 1989)	この2冊で大体のレファレンスに対応可。おまけに読みやすいので子どもにもOK!
13		「食品加工総覧」(農文協 加除式)	食品の加工法だけでなく、その歴史も載っていて意外と便利! まだ全巻発行されていないし。
14		「森の休日 1 拾って楽しむ紅葉と落ち葉」(山と渓谷社 2001)	難しい言葉も使わず、近隣の樹木ばかりを扱っていて、総合学習向き!
15		「版画事典」(室伏哲郎 東京書籍 1985)	大家ではないが、一般によく流通しているリトグラフの作者がここにしか掲載されていないときが。
16		「運動年鑑 全34巻」(日本図書センター 1984~85)	大正5年~昭和18年、23年~28年の戦前・戦後のスポーツの歴史や記録を探るときに便利。
17		「大辞典 全26巻のうち26巻目」(平凡社 2000)	索引巻にある「頭字索引」が部頭の漢字の画数順索引で、江戸時代以降の俗語や特殊な固有名詞を引くのに便利!
18		「統計さっぽろ」(雑誌)	各区の人口などが、詳しく掲載。
19	知恵	レファレンス記録票	3票獲得。
20		他館のレファレンス事例集	「あんなに苦労したレファレンス事例が...」何度も来る質問は他館のと比較できたりして参考に。勉強になる! 2票獲得。
21		他の職員の記憶	人様の記憶は頼りに。が、感わされることも...
22		1階雑誌の配置図	分類付き!
23		「暮らしの手帖」記事索引(道立図書館作成)	何かの作り方や実験の調査にGood!
24		「道立図書館報」の『レファレンスあれこれ』	食べ物、風物など同じ質問が何度も来る場合に役立つ!
25	HP	インターネット「楽譜屋」のHP	曲名や歌手名で検索可能(http://www.gakufuya.com/)。
26		インターネット「exciteの翻訳」のHP	英語のHPのアドレスを入力するだけで、そのHPの日本語訳を見ることができる便利ツール。 (http://www.excite.co.jp/world)。
27		インターネット「Yahoo!Japan」図書館カテゴリー	図書館に関するHPを探るときに便利。所蔵館調査の幅が広がったのもこのおかげ! (http://www.yahoo.co.jp/Reference/Libraries)
28	機関	各都道府県の博物館	地域内の情報を総合的に網羅。
29		北海道立地質研究所総務部企画情報係	とても親切。多少の無理も聞いてくれる!

おまけ: 当館 WebOpac その使い方

お待たせしておりました当館 WebOpac が稼動しました。
使い勝手の評価はいろいろあるでしょうが、何とかうまく使っていただくために、
ちょっとしたポイントをご紹介します。

困ったときは、「利用の手引き」を!

1 書名検索

漢字検索は、記号も含め表記のまま

教科書物語	かつ	▼
-------	----	---

書名中に「教科書物語」が含まれる資料を検索 (部分一致)

おススメ検索方法その1

教科書	かつ	▼
物語	かつ	▼

項目間に「教科書」と「物語」という単語を入れる
入れることによって、書名(本書名、副書名、叢書
名等)のどこかに、上記単語を含む資料を検索

やっではないけないその1

教科書 物語	かつ	▼
--------	----	---

漢字間にスペースを入れるとヒットせず!

2 著者名検索 おススメ検索方法その3

辺見	かつ	▼
庸	かつ	▼

項目間に「辺見」と「庸」という姓と名を別々に入れる
ことによって、姓に「辺見」、名に「庸」を含む著者名
を検索する。

漢字をカナに変えて、検索しても同じ仕組みOK。

カナ検索は、分かちが必要

キョウカシヨ モノガタリ	かつ	▼
--------------	----	---

単語間にスペースを入れることによって書名中に
に「キョウカシヨモノガタリ」を含む資料を検索 (部分一致)

おススメ検索方法その2

キョウカシヨ	かつ	▼
モノガタリ	かつ	▼

項目間に、「キョウカシヨ」と「モノガタリ」という
単語を入れることによって、書名(本書名、副書名、
叢書名等)のどこかに上記単語を含む資料を検索

やっではないけないその2

キョウカシヨモノガタリ	かつ	▼
-------------	----	---

カナ検索でベタウチするとヒットせず!

おススメしない検索方法

辺見 庸	かつ	▼
------	----	---

項目に姓と名の間にスペースを入れることによって、姓
「辺見」、名に「庸」を含む著者名を検索

ただし、当館のマーク取り込みの事情により、「辺見庸」
の著作を全部検索できない。

漢字で「辺見庸」とベタウチしたり、漢字をカナに変えて、
一字スペースをあけて検索しても全部検索できない。

書名 著者名 件名検索 漢字検索をする場合、表記のままに検索することが必須です。

また、長音記号、ハイフン、中黒などの記号も別々に識別してしまいます。

例えば、「ハリー・ポッターと秘密の部屋」を上記の の方法で漢字検索する場合、ハリーとポッターの間の中黒も入力が必要になります。
したがって、当館おススメの検索方法は、漢字でもカナ検索であっても、ひとつの項目に一単語を入力する、 の方法です。

出版者の検索のみ 漢字及びカナ検索においても一つの項目の中にベタウチで入力してください。長音記号、ハイフン、中黒などの記号
を別々に識別するのはどこでも同じです。

ISBN検索のみ ISBNだけは半角で入力です。あとは英数字であっても全角で入力してください。

募集しています!!

「市町村図書館職員レファレンス体験研修」特別講座
《インターネット活用初級編》ご案内

平成 13 年度から実施しているレファレンス研修ですが、2 年目の総まとめとしてインターネットに限定した研修を実施します。

調査環境の急激な変化のなかで、あなたの図書館では、従来の印刷資料に加えてインターネットをどのように活用していますか？ どのようにサービスに結びつけていますか？

現場で役立つ探索情報をお互いに持ち寄りましょう。

対象者：図書館の実務経験が1年以上で、インターネット経験者 【 10 名程度。先着順】

期日等：2月27日(木)13:00~17:00(予定) 【 受付開始：12:30】

会場：北海道立図書館会議室

主な内容： インターネット情報大作戦(115分) 【 インターネット画面使用によるデモ】

「インターネットで文献探索」(社団法人情報科学技術協会主催 日本図書館協会後援)参加職員による
伝達講習(20分) 【 予定】

情報交換 事前提出資料[アンケート含]を中心に(60分)

その他： 通常のレファレンス研修と同様に、事前の提出課題があります。【 集約し当日配付】

レファレンス課題2~3問 インターネット使用を想定した問題を解く。

アンケート“こいつは使えるレファレンスツールとしてのインターネット” “お気に入り”や、“こんな時に役立ったおすすめサイト”上位5位を推薦

機材の都合により、参加者によるパソコン使用の演習はしません。デモを交えた講義形式になります。デモは参考調査課員が担当します

参加申込の締切：1月28日(金)(下記申込書様式で参考調査課宛 FAX011-386 6906)

【受付後に、事前課題およびアンケート用紙を送付します。提出の締切は2月14日(火)です。】

市町村図書館職員レファレンス体験研修特別講座《インターネット活用初級編》
申込書

ふりがな 氏名	
所属・職名	
TEL	FAX
図書館(室)勤務年数(通算)	年
インターネット経験年数(公私不問)	年
平成14年度全道図書館参考調査部門研究集会(於札幌市 平成14.11.21.~22)参加の有無	あり なし

NEWS

北海道図書館振興協議会（北海道図書館総合目録研究会）から「相互貸借〈検索と申込み〉の基本原則」を送付

昨年11月、上記資料とともに《道内市町村（公民館等）貸出条件一覧》も送付しました。他館への相互貸借の依頼をする場合に、是非ご覧ください。

「貸出文庫（累積版）」以降の追加 平成12年度以降、次の図書が追加になっています。貸出申込みは奉仕課、リクエストは資料課へ。

書名	著者名	出版者名	出版年	分類
あかんべえ	宮部みゆき	PHP 研究所	2002	F
あべこべ	久世光彦	文芸春秋	2002	F
田舎医者	見川鯛山	毎日新聞社	1974	9
家族を「する」家	藤原智美	プレジデント社	2000	3
風の行方（上・下）	佐藤愛子	毎日新聞社	1997	F
からくりからくさ	梨木香歩	新潮社	1999	F
血脈（上・中・下）	佐藤愛子	文芸春秋	2001	F
だから、あなたも生きぬいて	大平光代	講談社	2000	2
辻邦生のために	辻 佐保子	新潮社	2002	9
本日も休診	見川鯛山	毎日新聞社	1979	9
森	野上弥生子	新潮社（文庫）	1996	F
流転の海（第1部～第4部）	宮本 輝	新潮社	2002	F

図書館パフォーマンス指標が、国内規格（JIS-X0812）に。

1998年に制定された国際規格（ISO11620）を基礎に翻訳。昨年10月20日に国内規格に制定されました。“JIS-X0812”は日本規格協会で2,700円で販売（税別）。この中に、レファレンスや情報探索などの指標もあります。当館では、現在発注中です。

編集後記

§ あけましておめでとうございます。2003年もたくさんのご利用をお待ちしております。

§ 昨年11月には、道民展示ホールでの資料展にあわせ、懲りもなく「別冊 Do-Re 2」を発行しました。皆さん、お手元に届いているでしょうか？

北海道新聞に掲載され、個人の方々からも多くの送ってほしいという電話があり、当館始まって以来(?)の電話の嵐。マスコミの影響力の大きさを改めて実感。だけど、「素朴な疑問ほど回答は難しい」ですよ…ねっ!!



Do - Re(どうれ) の由縁

“ どうりつとしょかんレファレンス ” の略から名付けました。
しかしながら “ Do ! Reference ” と
あるいは “ どれどれレファレンス ” からとの説もあります。

THE REFERENCE NEWSLETTER OF HOKKAIDO PREFECTURAL LIBRARY

Do - Re

北海道立図書館レファレンス通信 9(通巻13号)

発行年月日 平成15年1月10日

編集 北海道立図書館参考調査課

発行 北海道立図書館

〒069-0834 北海道江別市文京台東町4-1番地

Tel 011-386-8521 Fax 011-386-6906

ホームページ <http://www.dokyoi.pref.hokkaido.jp/hk-tosho/top.htm>
